

6.3 [日]

第10回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール／15時開演
Parthenon Popular Series, No. 10
Sunday, 3rd June, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center

指揮／井上道義 Conductor MICHIOYOSHI INOUE P. 6

チェロ／宮田 大 Cello DAI MIYATA P. 8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] P. 12
DVOŘÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104

- I. Allegro
- II. Adagio ma non troppo
- III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 〈田園〉 [約39分] P. 13
BEETHOVEN / Symphony No. 6 in F major, op. 68 “Pastorale”

- I. 田舎に到着した時の愉快的感情の目覚め
- II. 小川のほとりの情景
- III. 田舎の人々の楽しい集い
- IV. 雷雨・嵐
- V. 牧人の歌～嵐のあとの喜びと感謝の気持ち

[主催] 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社

6.19 [火]

第579回 定期演奏会
サントリーホール／19時開演
Subscription Concert, No. 579
Tuesday, 19th June, 19:00 / Suntory Hall

指揮／コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）
Principal Guest Conductor CORNELIUS MEISTER P. 7

チェロ／石坂団十郎 Cello DANJULO ISHIZAKA P. 8

ヴィオラ／柳瀬省太（読響ソロ・ヴィオラ） Viola SHOTA YANASE (YNSO Solo Viola) P. 9

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

R. シュトラウス 交響詩〈ドン・キホーテ〉 作品35 [約42分] P. 14
R. STRAUSS / Don Quixote, op. 35

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 歌劇〈カプリッチョ〉から
前奏曲と月光の音楽 [約11分] P. 16
R. STRAUSS / Prelude and Moonlight Music from “Capriccio”

R. シュトラウス 歌劇〈影のない女〉による
交響的幻想曲 [約20分] P. 17
R. STRAUSS / Symphonic Fantasy from “Die Frau ohne Schatten”

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
[協力] アフラック

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。



6.23 [土]	第105回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 105 Saturday, 23rd June, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
----------	---

指揮／**コルネリウス・マイスター**（首席客演指揮者）

Principal Guest Conductor CORNELIUS MEISTER **P.7**

ヴァイオリン／**長原幸太**（読響コンサートマスター） **P.9**

Violin KOTA NAGAHARA (YNSO Concertmaster)

コンサートマスター／**小森谷巧** Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

スメタナ **歌劇〈売られた花嫁〉序曲** [約7分] **P.19**

SMETANA / “The Bartered Bride” Overture

ブルッフ **スコットランド幻想曲** 作品46 [約30分] **P.20**

BRUCH / Scottish Fantasy, op. 46

Grave -

I. Adagio cantabile - II. Allegro -

III. Andante sostenuto - IV. Finale : Allegro guerriero

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク **交響曲 第8番** ト長調 作品88 [約37分] **P.21**

DVOŘÁK / Symphony No. 8 in G major, op. 88

I. Allegro con brio

II. Adagio

III. Allegretto grazioso

IV. Allegro ma non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

独立行政法人日本芸術文化振興会

[協力] 横浜みなとみらいホール



6.28 [木]	第613回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 613 Thursday, 28th June, 19:00 / Suntory Hall
6.29 [金]	非破壊検査 Presents 第20回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No. 20, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd Friday, 29th June, 19:00 / Festival Hall

指揮／**コルネリウス・マイスター**（首席客演指揮者）

Principal Guest Conductor CORNELIUS MEISTER **P.7**

ソプラノ／**ニコール・カベル** Soprano NICOLE CABELL **P.10**

メゾ・ソプラノ／**アン・ハレンベリ** Mezzo-Soprano ANN HALLENBERG **P.10**

合唱／**新国立劇場合唱団** Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS **P.11**

合唱指揮／**富平恭平** Chorusmaster KYOHEI TOMIHIRA **P.11**

コンサートマスター／**長原幸太** Concertmaster KOTA NAGAHARA

マーラー **交響曲 第2番** ハ短調 〈復活〉 [約80分] **P.22**

MAHLER / Symphony No. 2 in C minor “Resurrection”

I. Allegro maestoso Mit durchaus ernstem und feierlichem Ausdruck

II. Andante moderato Sehr gemächlich. Nie eilen.

III. In ruhig fliessender Bewegung

IV. “Urlicht” Sehr feierlich, aber schlicht

V. Im Tempo des Scherzo Wild herausfahrend

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[特別協賛] **非破壊検査株式会社** (6/29)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

独立行政法人日本芸術文化振興会 (6/28)

[協力] コジマ・コンサートマネジメント (6/29)

[マネジメント] キョードー (6/29)



井上道義

Michiyoshi Inoue

クラシック界の異端児
作品の神髄に迫る

斬新な発想力と豊かな音楽性を誇り、クラシック界に強いインパクトを与え続ける鬼才が登場。ベートーヴェンの名曲、〈田園〉交響曲で鮮烈なタクトを振る。

1946年東京生まれ。桐朋学園大学で齋藤秀雄に師事し、71年グイド・カンテルリ指揮者コンクールで優勝、一躍国内外の注目を集めた。これまでにニュージーランド国立響首席客演指揮者、新日本フィル音楽監督、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督、大阪フィル首席指揮者等を歴任。シカゴ響、ハンブルク響、ミュンヘン・フィル、レニングラード響、フランス国立管、ブダペスト祝祭管など世界の一流オーケストラに登場している。読響とは近年〈トゥーランドット〉などオペラ作品で多く共演し、マスカーニ〈イリス〉では第6回三菱UFJ信託音楽賞奨励賞を受賞した。

2007年、日本とロシアの五つのオーケ



©Mieko Urisaka

ストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を実施。音楽・企画の両面で大きな成功を収め、17年2月同プロジェクトを収録した「ショスタコーヴィチ交響曲全集 at 日比谷公会堂」BOXをリリース。15年には野田秀樹演出の全国共同制作オペラ〈フィガロの結婚〉で総監督を務め、読響との東京公演を含む10都市の巡回公演を成功へと導いた。17年、大阪国際フェスティバルで〈バーンスタイン：ミサ〉を総監督（演出兼任）として率いて、壮大かつ唯一無二の舞台を作り上げたと各誌で絶賛された。

◇6月3日 パルテノン名曲シリーズ

コルネリウス・マイスター

(首席客演指揮者)
Cornelius Meister

躍進を続ける新鋭が魅せる
豊潤な R. シュトラウス

近年、ドレスデン国立歌劇場で〈サロメ〉、ウィーン国立歌劇場で〈アラベラ〉など R. シュトラウス作品を振り、高く評価されているドイツ期待の若手指揮者。読響首席客演指揮者としての2年目は、得意の R. シュトラウス・

プログラムなどでその手腕を発揮する。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。ハノーファー音楽大学でピアノと指揮を学び、21歳でハンブルク国立歌劇場にデビューを果たした。2005年に24歳の若さでハイデルベルク市立劇場の音楽総監督に就任し、12年までその職にあった。10年からウィーン放送響の首席指揮者兼芸術監督を務めている。ウィーンのみならず、世界的な活動は高く評価されている。読響とは14年に初共演し、R. シュトラウス〈ア



©Marco Borggreve

ルプス交響曲〉で大成功を収めて以来、スケールの大きな演奏を聴かせてきた。

これまでにロイヤル・コンサートヘボウ管、バイエルン放送響、パリ管などに客演しているほか、オペラではウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラなどに登場。19年にはメトロポリタン歌劇場へのデビューが決まっている。18年9月からカンブルラン（読響常任指揮者）の後任として、ドイツのシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任する。

◇6月19日 定期演奏会
◇6月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇6月28日 名曲シリーズ
◇6月29日 大阪定期演奏会



©Yukio Kojima

チェロ 宮田 大

Cello Dai Miyata

日本を代表する、若手チェリストの筆頭株。1986年宇都宮市生まれ。2005年に日本音楽コンクールで第1位、09年にロストロポーヴィチ国際チェロ・コンクールで日本人として初優勝し、脚光を浴びた。同年、ジュネーヴ音楽院を卒業、13年6月にクロンベルク・アカデミー修了。国内の主要オーケストラのほか、パリ管、スロヴァキア・フィルなどと共演。楽器は1698年製ストラディヴァリウス「Cholmondeley」（上野製薬貸与）、1710年製M.ゴフリラー（宗次コレクション貸与）。読響とは10年に初登場以来、数多く共演している。

◇ 6月3日 バルテノン名曲シリーズ



©Marco Borggreve

チェロ 石坂団十郎

Cello Danjulo Ishizaka

欧州を拠点に世界各地で活躍する俊英チェリスト。日本人とドイツ人の両親を持ち、ミュンヘン国際音楽コンクール、ルトスワフスキ国際コンクールなど数多くの国際コンクールで優勝。これまでにエッシェンバッハ、ノリントン、スラットキンらの指揮でバイエルン放送響、ウィーン響、ロンドン・フィルなどと共演。数々のCDをリリースし、ドイツの権威あるエコー・クラシック賞に輝くほか、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。楽器は日本音楽財団より貸与された1730年製ストラディヴァリウス「フォイアマン」。読響との共演は2回目となる。

◇ 6月19日 定期演奏会



©読響

ヴァイオラ 柳瀬省太

(読響ソロ・ヴィオラ)
Viola Shota Yanase (YNSO Solo Viola)

読響が誇るソロ・ヴィオラ奏者が、〈ドン・キホーテ〉で愛すべき実直な従者サンチョ・パンサを快活に描く。東京芸術大学、桐朋学園ソリスト・ディプロマコースに学ぶ。ジュネーヴ国際音楽コンクール・ディプロマ賞、淡路島しづかホール・ヴィオラ・コンクール第1位。渡欧し、シュトゥットガルト歌劇場管などで活躍。2009年から神奈川フィル首席ヴィオラ奏者を務めた後、14年読響ソロ・ヴィオラ奏者に就任。ソロや室内楽活動も展開し、ストリング・クワルテットARCOのメンバーとしても活躍している。

◇ 6月19日 定期演奏会



©読響

ヴァイオリン 長原幸太

(読響コンサートマスター)
Violin Kota Nagahara (YNSO Concertmaster)

読響を牽引する実力者が、ブルッフで才気煥発ぶりを披露する。東京芸術大学、ジュリアード音楽院に学ぶ。ヴィエニャフスキ国際コンクール（17歳以下の部）第3位、日本音楽コンクール最年少優勝。これまでに、小澤征爾、岩城宏之、秋山和慶、ボッセらの指揮者と共演。室内楽や各楽団の客演コンサートマスターとしても活躍し、別府アルゲリッチ音楽祭、宮崎国際音楽祭などに出演。2006年から12年まで大阪フィル首席コンサートマスターを務め、14年読響コンサートマスターに就任。東京芸術大学非常勤講師。

◇ 6月23日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©Devon Cass

ソプラノ ニコール・カベル

Soprano Nicole Cabell

アメリカのカリフォルニア生まれ。2005年英国・BBC カーディフ国際声楽コンクールで優勝した、今人気の高いリリック・ソプラノ歌手の一人。イーストマン音楽学校で声楽を学び、シカゴ・リリック・オペラで研鑽^{けんさん}を積んだ。オペラとコンサートの双方で活躍しており、メトロポリタン歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ベルリン・ドイツ・オペラなどに出演するほか、バレンボイム、ハイティンク、マズア、パッパノーラの指揮で、ボストン響、ニューヨーク・フィル、BBC響などと共演している。読響初登場。

◇ 6月28日 名曲シリーズ
◇ 6月29日 大阪定期演奏会



©Orjan Jakobsson

メゾ・ソプラノ アン・ハレンベリ

Mezzo-Soprano Ann Hallenberg

スイス生まれ。モンテヴェルディなど17世紀初期の作品から、20世紀のワックスマンに至るまで幅広いレパートリーを誇る、世界的なメゾ・ソプラノ。ミラノ・スカラ座、チューリヒ歌劇場、バイエルン国立歌劇場などで活躍するほか、ザルツブルク音楽祭、ボーン古楽音楽祭など欧米の音楽祭にも登場し、好評を博している。これまで、ハーディング、ムーティ、ミンコフスキ、ツァゲロゼクらの指揮でベルリン・フィル、パリ管、BBC響、ロサンゼルス・フィルなど世界の一流楽団と共演。読響初登場。

◇ 6月28日 名曲シリーズ
◇ 6月29日 大阪定期演奏会

合唱

新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。現在、メンバーは100名を超え、新国立劇場の多様な演目によりレパートリーを増やしつつある。高水準の歌唱力と演技力を有し、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家から高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇ 6月28日 名曲シリーズ
◇ 6月29日 大阪定期演奏会



合唱指揮 富平恭平

Chorusmaster Kyohei Tomihira

東京生まれ。東京芸術大学指揮科卒業。指揮を高関健、田中良和の各氏に師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場等のオペラ公演で副指揮、合唱指揮、コレペティトゥアを務める。これまでに手掛けた作品は、〈フィガロの結婚〉〈椿姫〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈ばらの騎士〉など多数。昨年の〈アッシジの聖フランチェスコ〉の合唱指揮も務めた。群馬交響楽団、東京フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団にも客演している。洗足学園大学非常勤講師。2010年より新国立劇場音楽スタッフ。

◇ 6月28日 名曲シリーズ
◇ 6月29日 大阪定期演奏会

6.3 [日]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

作曲：1894～95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）のチェロ協奏曲は、ニューヨークのナショナル音楽院の初代院長として滞在したアメリカ時代（1892～95年）の最後に作曲された。きっかけは、アメリカの作曲家でチェロの名手でもあったヴィクター・ハーバートのチェロ協奏曲第2番。それを聴いて協奏曲の作曲を考えていたところ、同郷のチェロ奏者ハヌシュ・ヴィーハンから依頼を受けた。

帰国後、終楽章のコーダの拡大など手を入れ、完成させた。ヴィーハンはそこにカデンツァを加えることを提案したが、受け入れられなかった。そのこともあってか、作品はヴィーハンに献呈されたものの、初演ではイギリスのレオ・スターンが独奏を務めた。

第1楽章 アレグロ、ロ短調 序奏をもたず、クラリネットによるスラヴ色の濃厚な第1主題、ホルンの表情豊かな第2主題が提示され、その後、独奏チェロが二つの主題を朗々と奏でる。劇的緊張に満ちているが、五音音階による美しい第2主題は心を和ませる。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロッポ、ト長調 牧歌的な主題がまずクラリネットで、続いて独奏チェロで歌われる。中間部（ト短調）の独奏チェロのロマンティックな主題は、自作の歌曲（op.82-1）からの引用である。

第3楽章 アレグロ・モデラート、ロ短調 ボヘミアの民俗舞曲風の力強いリズムで、独奏チェロの決然とした主題が繰り返される。長大なコーダでは第1楽章の第1主題も回想される。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

ベートーヴェン
交響曲 第6番 ヘ長調 作品68〈田園〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約39分

自然をこよなく愛したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、散歩を日課とし、それを心の寄りどころとしていた。交響曲第6番〈田園〉は、ほぼ同時に作曲が進められた第5番〈運命〉とは性格が異なり、自然の情景と結びついた標題的な要素を音楽に取り入れている。ここでの標題は音楽の内容を規定するものではなく、ベートーヴェンは、聴き手の想像力を刺激する契機と考えていた。楽譜には「田園交響曲、あるいは田舎での生活の思い出。音画というよりも感情の表出」と記され、音楽による自然の描写よりも、感情の表現が強調された。彼がこのように書いたのは、当時、シュトゥットガルトの宮廷楽長クネヒトが書いた自然描写の交響曲が人気を集めていたこととも関係があるだろう。流行の作曲家と自分の交響曲は違うという強い思いを、そこに込めたかったのかもしれない。

標題以外にも、ベートーヴェンは、第6番で新しい試みを行っている。楽器編成に第5番と同様、神や自然を暗示するとされるトロンボーンや、高音

域のピッコロ（第4楽章のみ）を交響曲で初めて加えた。さらに、第3楽章から終楽章まで切れ目なく演奏する指示も、革新的な挑戦と言えるだろう。**第1楽章**“田舎に到着した時の愉快的感情の目覚め” アレグロ・マ・ノン・トロッポ ヴァイオリンの明るく穏やかな第1主題で始まる。晴れやかな第2主題とともに田園の爽やかな気分を思わせる。

第2楽章“小川のほとりの情景” アンダンテ・モルト・モート 澄んだ小川の流れのようなヴァイオリンの第1主題が美しい。終盤、ナイチンゲール、ウズラ、カッコウの鳴き声が聞こえる。**第3楽章**“田舎の人々の楽しい集い” アレグロ 3拍子と2拍子の舞曲が交替するスケルツォ。

第4楽章“雷雨・嵐” アレグロ 遠くで雷鳴が鳴り響き、近づく嵐の様子が克明に描かれる。

第5楽章“牧人の歌～嵐のあとの喜びと感謝の気持ち” アレグレット 嵐が去った後の情景。クラリネットやホルンによる牧歌的な主題は、アルペンホルンの響きを模したとも言われる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部

田辺秀樹 (たなべ ひでき)・音楽評論家

R. シュトラウス
交響詩〈ドン・キホーテ〉作品35

作曲：1897年12月29日（完成）、ミュンヘン／初演：1898年3月8日、ケルン／演奏時間：約42分

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）の優に70年を超える創作活動は、大きく交響詩中心の前半とオペラ中心の後半に分けられる。交響詩で扱われた題材はドン・ファン、マクベス、ティル・オイレンシュピーゲル、ツァラトゥストラ、ドン・キホーテ、「英雄」など、男性中心が際立つのに対して、オペラではサロメ、エレクトラ、（題名役ではないが）元帥夫人、アリアドネ、「影のない女」、アラベラ……と、圧倒的に女性優位になっている。R. シュトラウスにおける男性原理から女性原理への転換というのは、面白いテーマになりそうだ。

それはさておき、1897年に作曲された「騎士的な主題による幻想的変奏曲」という副題をもつ〈ドン・キホーテ〉も、17世紀スペインの作家セルバンテスの名作でよく知られた、ひとつの典型的男性像——^{ちよとつ}猪突猛進型の夢想的理想主義者——を描いたR. シュトラウスの交響詩だ。主人公は、騎士道

物語の読みすぎで妄想のとりことなり、みずから騎士ドン・キホーテになったつもりで瘦せ馬ロシナンテにまたがり、従者サンチョ・パンサを伴って遍歴の旅に出る。やみくもな正義感に燃えて数々の滑稽な奇行を繰り返した末、最後は病に倒れて死ぬ。作曲にあたってシュトラウスは、主題（主従の二人を描く）と10の変奏（原作の数々のエピソードを描く）という形式をとり、冒頭に序奏、最後に終曲を付け加えた。楽曲は切れ目なく連続し、主人のドン・キホーテを表す独奏チェロと、従者のサンチョ・パンサを表す独奏ヴィオラによる二重協奏曲のような特徴をもつ。各エピソードはかなり明瞭に描写的・音画的に作曲されているが、スコアに標題の記載はない。各変奏の冒頭には「中庸の速度で」「気楽に」「戦士のように」「速く、嵐のように」といったドイツ語による速度や曲想の指示だけが与えられている。演奏の機会に作曲家自身がプログラム冊子のた

めに記したとされる各変奏についての簡略な解説のひとつは、次のようになっている。（〔カッコ〕内は筆者による補足）

序奏：主人公は騎士小説に熱中するあまり正気を失い、自らを騎士ドン・キホーテだと思い込む。

主題：騎士ドン・キホーテの悲しげな姿はチェロ独奏。サンチョ・パンサはバスクラリネット、テナーチューバ、ヴィオラ独奏。

第1変奏：美しいドゥルシネアを探し求めて、風変わりな二人組が発する。風車を相手の冒険。

第2変奏：大王の軍隊〔実際は羊の群れ〕との戦いに勝利する。

第3変奏：騎士と従者の対話。サンチョの要求、質問、格言。ドン・キホーテの教示、なだめ、約束。

第4変奏：懺悔者たちの行列を〔見て、妄想に取り憑かれ〕攻撃するが、大失敗。

第5変奏：見張りにいそしむドン・キホーテ。まだ見ぬドゥルシネアを思う。

第6変奏：農家の娘と出会う。サンチョは主人に、この娘は魔法をかけられたドゥルシネアだと説明する。

第7変奏：空中を馬で駆けめぐる。〔ウィンドマシンの使用〕

第8変奏：魔法をかけられた小舟に

乗って進むが、〔川に投げ出され、びしょ濡れの〕災難に会う。〔弦楽器のピッツィカートが水のしずくを表現〕

第9変奏：ラバに乗ったふたりの修道士〔2本のファゴット〕を、〔怪しい〕魔術師と思い込んで勝負を挑む。

第10変奏：光輝く月の騎士〔実際には、ドン・キホーテを妄想から目覚めさせようとする友人〕との決闘。闘いに敗れたドン・キホーテは武器を捨て、羊飼いになる決心をして故郷に帰る。

終曲：故郷で正気を取り戻したドン・キホーテは、最後の日々を平穏に過ごす。ドン・キホーテの死〔チェロのグリッサンド〕。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのシュトラウスは、才気あふれる前衛的作曲家として華々しい活躍をしていた。しかし、相次ぐ交響詩の成功で快進撃を続けるモデルネ（現代派）のトップランナーは、称賛だけではなく批判や揶揄的にされることも少なくなかった。そんなシュトラウスにとって〈ドン・キホーテ〉は、次にくる〈英雄の生涯〉とともに、自己憐憫もたっぷり含んだ、音楽によるひとつのアイロニカルな自画像だったといえるだろう。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ2、打楽器（シンバル、トライアングル、小太鼓、タンブリン、大太鼓、グロッケンシュピール、ウィンドマシーン）、ハーブ、弦五部、独奏チェロ、独奏ヴィオラ

R. シュトラウス

歌劇〈カプリッチョ〉から前奏曲と月光の音楽

作曲：1941年8月3日（完成）、ガルミッシュ／初演：1942年10月28日、ミュンヘン／演奏時間：約11分

「音楽による1幕の会話劇」と銘打たれた〈カプリッチョ〉は、リヒャルト・シュトラウスが作曲した最後のオペラ。第二次大戦中の1941年に完成され、翌42年にミュンヘンのバイエルン国立歌劇場で初演された。題材は、1786年にウィーンのシェーンブルン宮殿で皇帝ヨーゼフ2世の肝いりで上演されたサリエリ作曲の楽屋落ち喜歌劇〈初めに音楽、次に言葉〉のアイデアを取り入れたもので、オペラという芸術について関係者たちが議論を繰り広げる「オペラについてのオペラ」だ。台本の作者は、名指揮者として知られ、初演の指揮もしたクレメンス・クラウス。グルックとピッチニニの作品をめぐってオペラ論争が盛んだった18世紀後半のパリを舞台に、作曲家と詩人が美しい伯爵夫人に愛を捧げる。二人の男の間で揺れる伯爵夫人は、音楽と言葉が結びついて生まれるオペラ芸術のアレゴリーなのだ。この「三角関係」に、さらに劇場支配人、女優、歌手たち、プロンプターといった関係者たちが絡んで、オペラ芸術についての多面的な議論が繰り広げられる。伯爵夫人は最後に「言葉か音楽か」の選択を迫られるが、ど

ちらか一方に決めることはできず、鏡の中の自分の姿（オペラ芸術）に向かって自問するなかで、オペラは幕となる。

この歌劇の序曲ともいべき「前奏曲」は、オーケストラの中のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ各2本ずつによって演奏される弦楽六重奏の形をとる。18世紀フランスの様式を取り入れながら、ほのかな憂愁をたたえた典雅で優美な響きは、最晩年のシュトラウスならではのものだ。「月光の音楽」は、この歌劇の最終場面の開始を告げる、オーケストラによる間奏曲。舞台には誰もいなくなり、城館の広間は暗がりに包まれる。ホルンが限りなく叙情的で美しい旋律を静かに鳴らし始め、やがて弦楽器に引き継がれ、月光の明るさが増していくなか、曲は精妙な転調を繰り返しながら、うねるような陶酔感とともにひとしきり盛り上がり、やがてまた潮が引くように静かになっていく。そこへ伯爵夫人が物思いに耽（ふけ）りながら現れる。彼女は詩人（＝言葉）と作曲家（＝音楽）のどちらの愛にこたえるべきか、決めかねたまま、R. シュトラウス最後のオペラの幕が下りるのだ。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、バセットホルン、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部

R. シュトラウス

歌劇〈影のない女〉による交響的幻想曲

作曲：1946年5月30日（完成）／初演：1947年6月26日、ウィーン／演奏時間：約20分

〈影のない女〉による交響的幻想曲は、オペラ〈影のない女〉（1917年作曲／1919年ウィーン初演）の主要な楽曲部分をもとに、晩年のシュトラウスが第二次大戦後の1946年に編作した、演奏時間20分ほどのオーケストラ曲。初演は1947年、ウィーンでカール・ベームの指揮により行われた。

もととなったオペラ〈影のない女〉は、全部で15曲あるシュトラウスのオペラのうち7番目の作品で、台本はウィーンの詩人フーゴー・フォン・ホフマンスタール（1874～1929）による。ホフマンスタールとのコンビで書かれたシュトラウスのオペラとしては、〈エレクトラ〉（1909年）、〈ばらの騎士〉（1911年）、〈ナクソス島のアリアドネ〉（1916年、改訂版による初演）に続く4作目で、このあと二人の協作からはさらに〈エジプトのヘレナ〉（1928年）、〈アラベラ〉（1933年）の2作が生み出されている。

二人は〈ばらの騎士〉では20世紀の〈フィガロの結婚〉を目指したが、今度は第一次大戦に敗れたドイツ・オーストリアの苦難の時代に、文化復興の願いを込めて、いわば第2の〈魔笛〉を意識しながら創作にあたった。結果と

して〈影のない女〉は、さまざまの寓意や象徴を含む神秘的で大がかりなメルヘン風オペラとなり、いくぶん取つきにくいところがあるが、その内容を端的に言えば、「問題を抱えて幸福になれずにいる霊界と現実世界の二組の夫婦が試練を克服し、真に幸福な結びつきに至る物語」ということになる。舞台は東洋もしくは中近東あたりの架空の島。霊界の王の娘で皇帝の妻である皇后には「影がない」。「影」は子供を産む能力の象徴で、「影」を求めて彼女は人間界に下り、子供を産もうとしない染物屋の妻と「影」の取引をしようとする。しかし結局皇后は、他人を犠牲にしてまで自分が幸福になることを善しとせず、その断念を通じて試練にうち克って「影」を得る。皇后はついに皇帝との浄化された真実の愛をわがものとし、染物屋の夫婦も危機をくぐり抜けて互いへの愛を新たにし、両ペアにおける結婚が真に幸福なものとなり、子供たちの誕生が予告されてオペラは終わる。

このオペラでのシュトラウスの音楽は、非常に力のこもった壮麗かつ繊細なもので、オーケストラは最大規模のうえ、主役の歌手たちにとっても負担

6.23 [土]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

スメタナ

歌劇〈売られた花嫁〉序曲

作曲：1863～66年／初演：1866年5月30日、プラハ／演奏時間：約7分

“チェコ国民楽派の祖”と呼ばれるベドルジーハ・スメタナ（1824～84）は1856～61年、スウェーデンで指揮者として活躍し、帰国後は、オーストリア帝国の支配からの独立の気運が盛り上がる中で、民族主義的な音楽の主導者となった。そこで、自らが創設を推進した国民劇場のために、これまでなかったチェコ語による民族的なオペラの創作を企図し、最終的には8作を完成した。そのうち、最初にして最大の成功を収めたのが、第2作の〈売られた花嫁〉だ。

このオペラは、1863年から66年にかけて作曲され、プラハの国民仮劇場で初演された後、1870年の改訂を経て、全3幕の現形となった。ちなみに17歳年下のドヴォルザークは、スメタナ自身の指揮による初演の際にヴィオラを弾き、少なからぬ影響を受けている。本編は、農家の娘マジェンカと恋人イェニークが、妨害や勘違いの末に

めでたく結ばれるという、チェコ・ボヘミア地方の農民社会を舞台にしたコメディタッチの物語。音楽にも民俗舞曲や民謡の要素が多く取り入れられている。なお序曲は、1863年に完成され、同年11月にピアノ版で初演されたとの説もある。

序曲は、ヴィヴァチッシモ、ヘ長調。勢いよく出される導入主題に、力強く刻まれる第1主題、シンコペーションが特徴的な第2主題を加えたソナタ形式で書かれており、オーボエによる叙情的な主題などもまじえて、活気に満ちた音楽が繰り広げられる。絶え間なく続く細かな動きが際立ったこの曲は、オーケストラ——特に弦楽セクション——の実力を発揮するにふさわしく、同様の要素をもったモーツァルトの〈フィガロの結婚〉、格林カの〈ルスランとリュドミラ〉と共に、快速序曲の代表的存在ともなっている。

がきわめて大きいことから、初演以降、再上演の機会にはあまり恵まれなかった。シュトラウスは1946年6月7日、第二次大戦後の混乱を避けて滞在中のスイスから、南ドイツのガルミッシュのシュトラウス・ヴィラに住む孫のクリスティアン（当時14歳）に宛てた手紙のなかで、この「交響的幻想曲」にふれて、お爺ちゃんの頑張りをアピールするかのよう、こう記している。「最近私は、ロンドンのたいそう商売熱心な楽譜出版社で新たに私の楽譜を出版することになったブージー&ホークス社からの依頼を受けて、〈影のない女〉の最良の部分をつなぎ合わせた交響的幻想曲（総譜で60ページ）を書いた。この曲がコンサートで演奏されることで、オペラがもうちょっとポピュラーになってほしいと思うのだ。というも、このオペラの上演はたぶん当分のあいだ不可能ということになりそうだからね。おまえにもわかってもらえるだろうが、これまで私はずっと勤勉に仕事をして、いつも精神をなるべく新鮮に保つよう努力してきた。そうであればこそ、こうして82歳の誕生日を前にしてもなお、生産的なことを成しとげることができるのだよ」経済的にも苦しい状況にあった当

時のシュトラウスにとって、この編作の仕事の依頼がありがたいものだったことは想像に難くない。

曲は霊界の王カイコバードの動機（インパクトのある重々しい三つの音）で始まり、オペラのなかで用いられた人物、心情、象徴などを表すいくつもの主導動機のうち、主として人間界の染物屋の夫婦に関連するものがつなぎ合わされて、全体として変化と色彩に富む小規模な交響詩のようにになっている。後半、互いに愛を求め合う染物屋夫妻の二重唱の美しい旋律（ホルンの独奏で開始）から最終場面の大団円へと、^{じょうじょう}嫋々たる音楽の流れでのほろり詰めてゆくあたりは、管弦楽書法の巨匠シュトラウスの本領が遺憾なく発揮されていて圧巻。もとのオペラを見る前の耳慣らしにも、またシュトラウスの交響詩の^{だいごみ}醍醐味を手みじかに味わうの^{かつこう}にも、恰好の曲である。

なお今回は、現代ドイツを代表する作曲家のひとりペーター・ルジツカ（1948～）が2009年に編作したスコアによって演奏される。作曲家自身による版が、もとのオペラにおけるよりも若干小規模な楽器編成であるのに対して、ルジツカ版はオペラでの楽器編成により近いものになっている。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット4（バスクラリネット持替）、バセットホルン、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8（テナーチューバ持替）、トランペット6、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、カステネット、ヴィブラフォン）、ハープ2、チェレスタ2、オルガン、弦五部

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ブルッフ スコットランド幻想曲 作品46

作曲：1879～80年／初演：1881年2月22日、リヴァプール／演奏時間：約30分

ブラームスと同時代のドイツ・ロマン派の作曲家マックス・ブルッフ（1838～1920）は、何と言っても1866年作のヴァイオリン協奏曲第1番で知られている。本作は、それに次ぐ代表作のひとつ。やはりヴァイオリンを独奏に据えた協奏作品である。

1880年からイギリスのリヴァプール・フィルハーモニック協会の指揮者となったブルッフだが、創作前にスコットランドを訪れた経験はなく、作曲のきっかけは、当地出身の作家ウォルター・スコットの小説に感銘を受けたことにあるという。作曲は1879～80年になされ、初演は1881年、創作上の助言者ヨアヒムの独奏、作曲者が指揮するリヴァプール・フィルの演奏で行われた。ただ、もともとはサラサーテへの献呈が意図されており、彼の独奏で1880年9月に初演されたとの説もある。

曲は、本作の別名「スコットランド民謡の旋律を自由に用いた、管弦楽とハープを伴うヴァイオリンのための幻想曲」の通りの内容。各楽章の主題には民謡（「スコットランド音楽博物館」なる文献から採られたとされる）が使用され、技

巧的な動きを随所でみせるヴァイオリンはもとより、ハープを効果的に用いながら、甘美で夢幻的な音楽が展開される。**序奏** グラーヴェ 低音主体の陰鬱な響きに始まり、悲しげなソロが奏される。切れ目なく第1楽章へ。

第1楽章 アダージョ・カンタービレ 懐かしさが漂う“森を抜けよ、若者よ”（旧説では“年老いたロブ・モリス”）に基づく美しい音楽。

第2楽章 アレグロ “粉まみれの粉屋”を用いた快活なスケルツォ楽章。冒頭でバグパイプ風の響きも聞かれる。最後はアダージョとなり、切れ目なく第3楽章へ。

第3楽章 アンダンテ・ソステヌート 哀感が濃い“ジョニーがいなくてがっかり”に基づくノスタルジックな音楽。ポップス等にも編曲されている。

第4楽章 フィナーレ、アレグロ・グエッリエーロ（戦闘的な） 戦いの歌“スコットランドの民よ”を中心にした終曲。行進曲調で進みながら、技巧的な変奏が展開され、ブルッフ作の叙情的な主題も登場。最後に第1楽章の主題が顔を出し、力強く結ばれる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約37分

チェコの国民音楽に国際的な普遍性を付与した大作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の、第9番〈新世界から〉と並ぶ人気交響曲。

1885年、イギリスで再三歓迎を受けるなど、大家となりつつあったドヴォルザークは、自然豊かなボヘミアのヴィソカーに別荘を設け、それを契機に、絶対音楽と民俗音楽が融合した独自の作風を完成させていった。本作はその最上の成果とも言える1曲。1889年秋に一気に作曲され、翌年作曲者自身の指揮で初演された。

本作は以前〈イギリス〉と呼ばれていたが、それは、これまで作品を出版していたドイツのジムロック社と折り合いが悪くなり、イギリスのノヴェロ社から出版されたことに拠るもの。実際は地元の自然や民俗的なイメージを音にした「ボヘミア」と称すべき内容であり、そうしたローカル色と西欧的な交響曲様式を巧みに同化させた傑作である。

曲は、明快で旋律美に溢れ、かつ独創性も十分。第1楽章は、ト長調が基調の楽章をト短調の憂いに充ちた旋律で開始するという、意外性のある手法

が用いられている。第1、第2楽章の即興的な変化、第2楽章の自然を彷彿させる楽想や幅広いダイナミクス、第3楽章の哀愁漂う美しさも特筆もの。第4楽章は、交響曲の終楽章には珍しい変奏曲であるうえに、別の主題も加わる点がユニークだ。また、全体にフルートの活躍が際立っている。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 冒頭の主題やフルートが歌う明るい主題を中心に、短調と長調の旋律が交代しながら、伸びやかな音楽が繰り広げられる。

第2楽章 アダージョ 田園的な緩徐楽章。哀感を湛えた主題が軸となり、木管楽器で小鳥の鳴き声のようなフレーズも奏される。時に激しく盛り上がり、中間部は明るく優美で活気を帯びる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ スラヴ舞曲を思わせる音楽。メランコリックな主部に、切ないワルツ風の中間部が挟まれる。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ ファンファーレに続いて、チェロが出す主題をもとに、変化に富んだ変奏が展開される。途中で短調の新たな旋律も登場。最後は輝かしく結ばれる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

6.28 [木]

6.29 [金]

船木篤也 (ふなき あつや)・音楽評論

マーラー 交響曲 第2番 ハ短調 〈復活〉

作曲：1888～94年／初演：第1、第2、第3楽章、1895年3月4日、ベルリン。
全楽章、同年12月13日、ベルリン／演奏時間：約80分

大オーケストラに独唱、そして合唱。見かけが祝祭的と映るのか、ホールのリニューアル記念などでも好んで演奏される本作だが、その通称〈復活〉を「新たな始まり」といった意味に平俗化すると、グスタフ・マーラー（1860～1911）本人の意図から逸れることになる。

この通称は、第5楽章の合唱に由来する。「蘇る そう おまえは蘇るであらう」に続く第1連、第2連。ここはドイツの詩人フリードリヒ・ゴットリープ・クロプシュトック（1724～1803）による詩「復活」からの、ほぼ字句どおりの転用である。神と人間の仲介者たる主イエスは、死後に蘇った。あの復活の事跡が保証するように、朽ちるべき私たちも、最後の審判ののちに不死の命を得る——つまり本作は、キリスト教の信仰に根ざしているのだ。なるほど、クロプシュトックの詩はこの2連だけであり、第5楽章の残りの歌詞はマーラーが創作した。しかし、それとてキリスト教思想をふ

まえたものであって、メッセージの核心は、『新約聖書』の次の一節を知ることにより明確になるだろう。「主に結ばれているならば、自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」（新共同訳、コリントの信徒への手紙1より）

さて、この交響曲の完成までには、少なからぬ時間がかかった。ボヘミア地方の小村カリシュト（現チェコ領）に生まれたマーラーが、ウィーン音楽院を卒業後、歌劇場の指揮者業を転々としたことはよく知られていよう。第2交響曲の成立時期は、ライプツィヒ、ブダペスト、ハンブルク赴任時代にあたる。

まず、現在の第1楽章にあたる音楽が、1888年、ライプツィヒ時代に書かれた。その後マーラーは、これを〈葬礼〉なる題のもと交響詩として独立させる考えも抱いていたようで、交響曲化はいったん止む。第2、および第3楽章に着手したのは、ようやく1893年の夏、ハンブルク時代のことだっ

た。第4楽章も、同夏に書いた歌曲をあてがうことで落着。残るはフィナーレのみ、というときに出会ったのが、先のクロプシュトックの詩であった。マーラーは、高名な指揮者ハンス・フォン・ビューローの葬儀に参列した折（1894年3月）、その詩が歌われるのを耳にし、「これだ！」とひらめいたという。全曲初演は1895年12月。97年の2月には、マーラーはユダヤ教からキリスト教に改宗している。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ 一貫して真面目かつ厳かな表情で 大規模な展開部をもつソナタ形式。〈葬礼〉を改稿したものだが、死したある人間の前で生と死の意味を問うという詩的コンセプトは変わらない。“すべては、ただ荒涼たる夢に過ぎぬのか？”（マーラーによるコメント。以下同）。これに対する「いや、そんなことはない」という最終回答が、第5楽章である。

第2楽章 アンダンテ・モデラート きわめてゆったりと。決して急がずに 間奏曲その1。“かけがえなき故人の生涯の、浄福のとき”。舞曲風のAと、ベートーヴェンの第9交響曲・第2楽章にも似たBが、交互に展開する。

第3楽章 落ちついた流れるような動きで。きわめてゆったりと、急がずに

間奏曲その2。スケルツォとトリオが交互に展開し、“ばか騒ぎ”たる人生を表現。スケルツォには、自作の歌曲〈魚に説教するパドヴァの聖アントニウス〉を使用。民謡集「少年の不思議な角笛」から詩をとった歌曲で、本楽章を作曲した1893年夏に、マーラーはこれを含め4つの〈角笛〉歌曲を書いている。**第4楽章** 〈さいしょの光〉。きわめて厳かに、ただしシンプルに 1893年夏の〈角笛〉歌曲〈さいしょの光〉を転用（共用）。ここで初めて人声が加わる。間奏曲その3、もしくは第5楽章への序奏とみなせよう。歌詞にいう「赤いバラ」は、イエスの象徴。

第5楽章 スケルツォのテンポで。荒々しく、いきり立つように 第3楽章頂点の再現によって導入。A：最後の審判の告知（提示部）、B：最後の審判（展開部）、C：合唱と独唱が加わる復活カンタータ（再現部）と続く。Aは遠方からのホルンの呼び声に始まり、Bの開始前には、最弱音から最強音に膨れ上がる打楽器の連打がある。Cの開始部“大いなる呼び声”では、遠方の金管群+ティンパニと、舞台上のフルート属が交錯する。「怒りの日の動機」「永遠の動機」など、第1楽章で聴いたモチーフがそこかしこで用いられる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット4（バスクラリネット持替、エスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン10、トランペット10、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（太鼓、シンバル、グロッケンシュビール、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、小太鼓、銅鑼、ベル、ルーテ）、ハープ2、オルガン、弦五部、独唱（ソプラノ、メゾ・ソプラノ）、合唱

4. Satz: Urlicht

ALT-SOLO

O Röschen roth!
Der Mensch liegt in grösster Noth!
Der Mensch liegt in grösster Pein!
Je lieber möcht' ich im Himmel sein!
Da kam ich auf einen breiten Weg;
Da kam ein Engelein und wollt' mich
abweisen.
Ach nein! Ich ließ mich nicht abwei-
sen:
Ich bin von Gott und will wieder zu
Gott!
Der liebe Gott wird mir ein Lichtchen
geben,
Wird leuchten mir bis in das ewig se-
lig Leben!

Aus „Des Knaben Wunderhorn“

5. Satz: Auferstehung

CHOR und SOPRAN

Aufersteh'n, ja aufersteh'n wirst du,
mein Staub, nach kurzer Ruh!
Unsterblich Leben
wird der dich rief, dir geben!

Wieder aufzublüh'n wirst du gesät!

Der Herr der Ernte geht
und sammelt Garben
uns ein, die starben!

ALT-SOLO

O glaube, mein Herz, o glaube:
Es geht dir nichts verloren!
Dein ist, dein, ja dein, was du gesehnt!

第4楽章 さいしょの光

アルト独唱

ちいさな赤いバラよ
ひとの世は こんなにも苦しい
ひとの世は こんなにも辛い
それだけに いっそ天国に暮らしたいと思う
とある ひろい道に出ると
天使がひとり わたしを追いかえそうとした
そうはゆくものですか! わたしは引き下が
らなかった
神さまのもとからきたのだから 神さまのも
とへ戻りたいだけ
やさしい神さまのこと わたしにも 灯かり
をくださるだろう
灯かりによってお導きになるのだ 永遠なる
満ちたりた生へと

『少年の不思議な角笛』より

第5楽章 復活

合唱とソプラノ

蘇る そう おまえは蘇るであろう
わが塵よ しばしの憩いの後に!
不死の生命を
おまえを召したお方が 与えてくださるだろう!

ふたたび花咲くために 種たるおまえは蒔か
れるのだ!

収穫の主は 行きて
束をお集めになる
死した我らを お集めになる!

アルト独唱

おお 信ぜよ わが心よ 信ぜよ
おまえは何一つ 失いはしない!
おまえのもの そう おまえのものだ おま
えが憧れたものは!

Dein, was du geliebt,
was du gestritten!

SOPRAN-SOLO

O glaube: Du wardst nicht umsonst
geboren!
Hast nicht umsonst gelebt, gelitten!

CHOR

Was entstanden ist, das muss vergehen!
Was vergangen, auferstehen!

CHOR und ALT

Hör' auf zu beben!
Bereite dich zu leben!

SOPRAN und ALT

O Schmerz! Du Alldurchdringer!
Dir bin ich entrungen!
O Tod! Du Allbezwinger!
Nun bist du bezwungen!
Mit Flügeln, die ich mir errungen
in heissem Liebestreben,
werd' ich entschweben
zum Licht, zu dem kein Aug' gedrun-
gen!

CHOR

Mit Flügeln, die ich mir errungen
werd' ich entschweben
Sterben werd' ich, um zu leben!

CHOR, SOPRAN und ALT

Aufersteh'n, ja aufersteh'n wirst du,
mein Herz, in einem Nu!

Was du geschlagen,
zu Gott wird es dich tragen!

Klopstock / Mahler (Strophen 1 & 2); Mahler

おまえのものだ おまえが愛したものは
おまえが勝ち取ったものは!

ソプラノ独唱

おお 信ぜよ おまえは無駄に生まれてきた
のではない!
おまえの生に 苦悩に 意味はあったのだ!

合唱

生まれしものは 消えゆくが定め!
消えゆくものは 必ずや蘇る!

合唱とアルト

おののくのを やめよ!
用意せよ 生を!

ソプラノおよびアルト

おお 痛みよ! 人皆を貫く おまえ!
おまえからわたしは いま逃れたのだ!
おお 死よ! 人皆を征す おまえ!
いまやおまえが 征されたのだ!
倦むことなく愛に生き
勝ちえたこの翼で
舞い上がろう
何びともまだ見ぬ あの光のもとへ!

合唱

勝ちえたこの翼で
舞い上がろう
生きんがために 死に赴かん!

合唱およびソプラノとアルト

蘇るであろう そう おまえは蘇るであろう
またたく間に わが心よ!

おまえの打ち克った苦難が
おまえを神の御もとへ運ぶであろう!

クロプシュトック/マラー (第1連・第2連); マラー

(訳: 船木篤也)